



Title	グレゴリー・ケズナジャットの芥川賞候補作を学際的に読むということ
Author(s)	橋本, 順光
Citation	大阪大学人文学林シンポジウム グレゴリー・ケズナジャットの芥川賞候補作を学際的に読む. 2026, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105160
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

はじめに
グレゴリー・ケズナジャットの芥川賞候補作を学際的に読むということ
橋本順光（人文学研究科人文学専攻）

東京の大学は常に英語と日本語ができる外国籍人材を求めていると聞いた。どうやらきみのような者が所属するだけで、大学はより「グローバル」と評価されるらしい。

きみは依然として教育に向いていないと感じる。ガバナンスだのブランディングだのイノベーションだの、そんな言葉の意味がよく分からないし、そもそも意味があるかどうかを疑わしく感じる。だが教室で学生とともに集まり、小説を読んで、彼らの素直な反応を聞くのは楽しい。

上記は、グレゴリー・ケズナジャット氏の小説『鴨川ランナー』(2021)の一節である(p.89)。「きみ」とあるのは、本書が、英語圏から京都を訪れた主人公について二人称で語られていることによる。京都の「不思議なガイジン」(p.61)という視点ではなく、京都で谷崎潤一郎作品と出会い、のちに東京の大学で教えるようになった「きみ」の物語として語るという点に、本作の意表を突く趣向がある。第一作にして早くも才覚を示した本作は、第二回京都文学賞を受賞した。そして、それからまもなく刊行された『開墾地』(2023)と『トラジェクトリー』(2025)は、よく知られているように芥川賞候補となった。この報告書は、2025年11月28日に大阪大学会館で行われた人文学林シンポジウム「グレゴリー・ケズナジャットの芥川賞候補作を学際的に読む」の記録である。著者のケズナジャット氏に講演いただき、シンポジウムではまさに上記の引用にある「教室」のように、著者と共にその作品について読み、議論を行った。ご多忙の中、快くご来校くださり、長時間のシンポジウムにご参加いただいただけでなく、本は全ての人に開かれているという講演での印象的な言葉通り、それをその後の質疑応答でも強く聴衆に実感させてくれたケズナジャット氏に、厚く感謝の言葉を申し上げたい。

山本佳樹研究科長の開会の辞で始まった当日は、鈴木啓峻氏の司会のもと、発言順に、渡邊英理氏、岡田悠佑氏、橋本順光、ジェイ・ベヘナム氏、木原善彦氏からのコメントが続き、その後、ケズナジャット氏を交えて応答と議論が行われた。ケズナジャット氏の講演に先立ち、サレヒ・メヌシュ氏の舞踊によって、本シンポジウムが文字通り「饗宴」にふさわしい場になったことも強調しておきたい。この充実した企画を立案から実現に向けて奔走し、大学院生を指揮して中身の濃い報告書作成に至るまでご尽力くださったのは、言語文化学専攻のアミン・ガデミ氏である。改めて氏の弛まぬご助力にお礼申し上げたい。

この人文学林シンポジウムは、大阪大学人文学研究科の教員相互の交流と発信を目的として、人文学林学術推進部門の活動の一環として開催され、この報告書も作成されている。人文学研究科は、順不同で言語文化学専攻、外国学専攻、日本学専攻、人文学専攻、芸術学専攻と、五つの専攻から成る。人文学林はその複数の専攻にまたがる研究の交流と

活性化を旨として、2023 年からおおむね年二回のペースでシンポジウムを開催してきた。その成果の一端は、人文学林ライブラリーと題したシリーズで大阪大学出版会から刊行されることが予定されており、本報告書も越境についての一冊と相補的な関係にあることを申し添えておきたい。

総じて、人文学の研究者たちが実作者を前にして、その作品について公開の場で忌憚なく意見を述べ、議論することは、極めて得難いことである。知的緊張や心理的負荷を伴う作業であり、正直、一参加者としては、どこかしら大学の演習で発表する前の気分に襲われたことを告白しておきたい。しかし、それはまったくの杞憂に終わり、参加者一同がさまざまな立場から小説を読み、味わう面白さを実感する稀有な時間となった。それこそ、教室で無心に楽しむことのできた学生の頃の興奮を思いおこされたのである。

それはケズナジャット氏が解釈を決して限定せずに、作品を常に読者に開かれたものとして語ったこと、つまり、氏が作家であると同時に文学研究者であるという姿勢を崩さなかったことが、やはり大きいと言わねばならない。冒頭の『鴨川ランナー』の引用は、その後、「それに読書に耽る時間はある。今も変わりなく、きみは休みの日の書店で過ごしている。そしてきみの部屋のあらゆる表面は今も書物に覆われている」と続く。大学が「ガバナンス」だの「ブランディング」だの「イノベーション」だのに振り回されるのはいずこも同じで、ケズナジャット氏は、それこそ法政大学グローバル教養学部にも所属する教員である。本シンポジウムは、それこそ似たような「部屋」の住人が、「読書に耽る」休みの日のような時間を持てたと言えるのかもしれない。

ただ、それは単に本好きがくつろぐための休息の時間にとどまるものではない。立場や地位の力関係に左右されず、虚心にテキストを読むこと。その際に、意見や立場の相違を尊重しつつも議論を進め、かといって性急に結論や序列化を求めないこと。この二つはつまるところ人文学の原点であり、最終的な目的とさえいえるのではないだろうか。

その点で示唆に富む言葉が、ケズナジャット氏の最新作『トラジェクトリー』(2025)に登場している。日本の大都市にある地下鉄の車内になら、必ずといっていいほど貼られている英会話学校の広告についての一節である。それらはいずれも立派な建物かオフィスを背景にして、スーツ姿の日本男女が、同じく「スーツ姿の白人男性」と笑顔で話している様子を映し出すことが多い(p.93)。つまるところ、それらの示す広告は、以下のような誘いの文句を語りかけているというのである。

グローバルな人間になってみないか。

この退屈で窮屈な社会を抜け出して、別の世界に入ってみないか。

ここなら上下関係もなければ煩わしい敬語もなく、揚げ足を取る同期もパワハラをしてくる上司も、今のあなたの人生を耐えられないものにさせているすべてのものが取り払われ、あなたがとっくに忘れてしまった人間性、本当の自分を取り戻すことが

できる。(p.93)

むろん、英会話学校はそんな「人間性」への道に通じる扉を約束するものではあるまい。むしろそこが、日本語社会の主流から少し外れた視点をもたらし、意外な出会いと変化を引き起こす場であることは、それこそ「ブリッジ英会話学校」を舞台とする『トラジェクトリー』が活写するとおりである。『トラジェクトリー』の読者は、とある受講生が、英語での作文を通して、およそその日本語の言動からは想像できない言葉を紡いでゆくのを目にするはずだ。「人から人へ掛け渡す橋はない」とは夏目漱石の『行人』(1914)に登場する「独逸の諺」である¹。なるほどそのとおり、「橋」を冠した「ブリッジ英会話学校」でも、そんな「橋」は懸けられることがない。事実、当の受講生はふとしたことから物語から退場し、その「人間性、本当の自分」はわからずじまいとなる。作文で書かれた出来事が本当なのか創作なのか、主人公にも読者にも確かめるすべはないまま小説は閉じられるのである。

しかし、ここでも読者は、「本」は全ての人に開かれているということを実感することになる。本人に確認できないからこそ、書かれた作文こと「本」は読者に無数の道を開き、読者もそこへ橋を架けようとすることになる。これはまた、『トラジェクトリー』を読むシンポジウムの参加者と、いわば入れ子になっている。つまり、英会話学校の受講生が書いた英作文を読む『トラジェクトリー』の主人公は、ケズナジャット氏が日本語で書いた小説を読む私たち読者と重ねられるのではないか。たしかに、ケズナジャット氏はそのシンポジウム会場にいるのだが、作品を開かれたものとして、読者が自由に架橋することをむしろ歓迎されていたからである。

その点で今回のシンポジウムは、少なくとも参加した私にとっては、「この退屈で窮屈な社会を抜け出して、別の世界に入って」いく格好の場となった。そして、上記に引用した英会話学校の広告が示唆するメッセージは、むしろ人文学が目指し、実現しようとしていることと実のところよく似通っているようにも感じ、閉会の辞ではそんなことを述べた。たしかに使用言語は日本語であり、衣服や建物の環境はおよそ英会話学校の広告とは程遠かったが、本シンポジウムは、そのようにフラットな関係でテキストについて議論することのグローバルな面白さを実感させる場だったからである。

むろん人文学によって「あなたの人生を耐えられないものにさせているすべてのものが取り払われ」ることはなく、「本当の自分」を取り戻すこともないだろう。ただし、「とっくに忘れてしまった人間性」を取り戻すことは十分にあることではないか。さまざまなバ

¹ この「諺」が、ドイツの作家 Walter Calé の『遺稿集』(1907)にある八行詩の末尾の一行に由来することについては、飛ヶ谷美穂子「ヴァルター・カレと漱石 共鳴する孤独ー『行人』のドイツ語句をめぐるー」『比較文学』59号(2016年)を参照。この夭折した無名詩人の詩が、死後、幾度も引用され、ついにその名も忘れられて「諺」となる過程もまた、書物が作者の手を離れて全ての人に開かれてゆくことをよく示している。

ックグラウンドをもつ参加者が「上下関係」に支配されずに「別の世界」を読み取り、読み解く人文学という場は、それだけの力があるはずである。

ここに収められたシンポジウムの記録と報告書も、そんなふうになんとも多くの「きみ」にとって、そのような人文学の原点と目的を再確認する契機になれば、人文学林学術推進部門を代表して携わった一人として、これに過ぎる喜びはない。そして人文学研究科が今後もそんな場となり、そのような場をさらに作り出していくことを強く祈念したいと思う。最後になるが、煩瑣になるため一人一人の名前を挙げることは控えるものの、事務方含め、実施と運営に関わったすべての方々と当日の参加者へ、感謝の念を改めて記したい。